

令和 3 年 5 月 29 日現在

機関番号：23803

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2020

課題番号：16K03481

研究課題名（和文）初期近代スペインにみる「キリスト教君主」論 反マキアヴェリズムの系譜

研究課題名（英文）The Idea of a Christian Prince in Early-Modern Spain: A Genealogy of Anti-Machiavellianism

研究代表者

松森 奈津子 (Matsumori, Natsuko)

静岡県立大学・国際関係学部・准教授

研究者番号：80337873

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、スアレス、リバデネイラ、マリアナといった思想家が、統治者のあるべき姿を追究する過程で精緻化した「キリスト教君主」論の特質と意義を解明する試みである。具体的には、「君主の鑑」論の系譜とも関連づけながら、マキアヴェリズムに対する彼らの批判的見解を分析し、「善き統治」、「善き信仰」、「有用な統治」を同一視するその理論的特質を明らかにした。それは、国家理性論や主権国家概念の確立期に、これらに帰着しない脱中世型政治共同体の可能性を提示した点で、注目すべき試みであった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「キリスト教君主」論は、国内外を問わず、「中世トマス主義の復興」程度にしか知られていない。本研究は、この理論を詳述する本邦で最初の、また国際社会でも数少ない学術研究であり、近代政治秩序の形成過程におけるその重要性を喚起する試みである。同時に本研究は、過去の思想状況の解明のみを目的とするのではなく、「キリスト教君主」論が、国家理性論や主権国家概念に帰着しない脱中世型政治共同体の可能性を追究した歴史的試みであった点に注目する。それは、近代主権に基づく国民国家体制が揺らいでいる今日の議論に対し、掘り所となる思考枠組の1つを提供しうる。

研究成果の概要（英文）：This study examined characteristics of the idea of a Christian prince, which the early modern scholastics had refined through the process of seeking the ideal ruler. Analyzing the refutations to Machiavellianism by Suarez, Ribadeneyra, and Mariana in relation with the discourse of mirrors for princes, this study clarified the fundamental characteristic of the idea of a Christian prince: the identification of “good rule,” “good faith,” and “useful governance.” These refutations are significant in that they sought other possibilities than theories of the reason of state and the sovereignty in the formative period of modernity.

研究分野：政治思想史、国際思想史

キーワード：マキアヴェリズム 君主の鑑 カトリシズム スアレス リバデネイラ マリアナ ポテロ 国家理性

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) これまでの研究成果

近代秩序の特質を理解するには、マキアヴェッリからホブズに至る国内統合/ヨーロッパ諸国家間関係樹立の論理だけでなく、インディアス問題などを通じて生成した「世界」秩序創出の論理をも解明する必要がある。このような理解に基づき、本研究代表者はこれまで4つの段階を経て研究を進めてきた。

近代の形成を異文化間秩序の面から考察し、「野蛮(非ヨーロッパ)」と「文明(ヨーロッパ)」を対置する近代的二分法とその対抗理論が16世紀スペインに芽生えた旨を論証した。

この過程で、影響力をもっていたサラマンカ学派の政治理論が、対外進出だけでなく主権国家体制の分析としても、豊かな内容を有していることが分かった。そこで、前期サラマンカ学派(c.1526-76:ピトリア~マンシオ)が形作ったカトリック世界の近代的権力・国家論を検討した。

つづいて、この国家論が後期サラマンカ学派(c.1576-1615:メディナ~スアレス)に、より世俗化されながら受け継がれるプロセスを検討した。

さらに、対抗宗教改革、植民政策(集住化)、啓蒙思想とも関連させながら、この学派の政治理論を基礎づけていた人間論、道徳論の特質を明らかにした。

(2) 着想の経緯

以上をふまえ、本研究は、サラマンカ学派を中心とする権力・国家論の分析をさらに発展させる試みである。同学派内の理論展開と相関関係を考察する過程で浮かび上がってきたのは、その権力・国家論は、中世を中心に興隆した「君主の鑑」論 支配者の職務に関する忠言 と連動する、統治者はどうあるべきかをめぐる諸議論に立脚していたということである。そうした諸議論は、直接的には、16世紀後半以降にスペインでも影響力をもったいわゆるマキアヴェリズムに対する反駁という形で示された。

ここから、次の課題は、この潮流への対抗概念として精緻化された「キリスト教君主」論の全容を解明し、初期近代ヨーロッパにおけるその地位と意義を確定することにあるという視座を固めるに至った。

2. 研究の目的

(1) 二つの主要目的

本研究の主な目的は、2つある。第一に、マキアヴェリズムに対する反論として展開された16、17世紀スペインの「キリスト教君主」論の全体像を明らかにすること、第二に、初期近代以降主流となる反スコラ主義や主権論に連なる諸理論との異同を考察することにより、「キリスト教君主」論の地位と意義を模索することである。

(2) 国内外の研究動向における位置づけ

スペインにおけるマキアヴェリズム受容に関する先行研究は、日本国内では著書、論文ともに公刊されていない。国外でも、スキナー〔Skinner 1978〕が通史で取り上げて以来注目されているが、個別の思想家についてマキアヴェッリ的か反マキアヴェッリ的かを判別することを主な目的とするか〔Forte et al. 2008, Howard 2014〕、プロテスタンティズム批判とも密接に関連する神学論の考察に偏るか〔Bireley 1990, Iglesias-Rondina 2014〕する傾向が強く、インディアス問題、公会議論争、恩寵論争、忠誠宣誓論争といった同時代の諸問題とも接続されるべきその全体像が正確に把握されてきたとはいえない。

本研究はこうした先行研究の不足を補う試みである。

文献一覧

Bireley, Robert, 1990, *The Counter-Reformation Prince*, University of North Carolina Press.

- Forte, Juan Manuel y Pablo López Álvarez (eds.), 2008, *Maquiavelo y España*, Biblioteca Nueva.
- Howard, Keith David, 2014, *The Reception of Machiavelli in Early Modern Spain*, Tamesis Books.
- Iglesias-Rondina, Clara, 2014, *Maquiavelo y los Jesuitas*, CreateSpace.
- Skinner, Q., 1978, *The Foundations of Modern Political Thought*, 2 vols., Cambridge University Press.

3. 研究の方法

これらの目的を達成するため、テキストの内在的分析に重点をおきながら、中世から近代に至る「君主の鑑」論の変遷をめぐる通時的分析をも試みる。

(1) 内在的分析

当時のスペインにおいて、法や道徳よりも君主や国家の利益を優先させる言説として流布したマキアヴェリズム(必ずしもマキアヴェリ自身言説に合致するわけではない)に対し、リバデネイラ、マリアナ、スアレスらが展開した反マキアヴェリズムの系譜を考察する。その際、一部の未公開原典については、スペインやイタリアの所蔵機関に当時の版や手稿本の形でのみ残されているため、入念な資料調査が必要になる。最新の学問動向をふまえた一次資料の吟味により、世俗権力に対して常に法と正義の遵守を求めた彼らの議論の詳細を明らかにし、本研究の第一の目的の達成を試みる。

(2) 通時的分析

「キリスト教君主」論を、近代国家論の形成とも連動した「君主の鑑」論の変遷という文脈に位置づけることにより、その独自性と意義を問う。まず、スマラグドゥスからアエギディウス・ロマヌスに至る中世の「信仰に基づく善き」統治者観から、マキアヴェリやサアベドラ・ファハルドによって展開された「信義に反しても国家の生存を優先させる」統治者観に至る変遷過程を追う。そして、サラマンカ学派と周辺の思想家が、世俗権力の起源(神と自然)と性質(宗教権力に対する優越性の欠如)、個人概念の希薄さ(共同体志向)という点で、一般に中世的思考にとどまるとされるゆえんを明らかにする。ついで、そうした特質が実際には中世の延長上にあるのではなく、国家理性論や主権論にゆきつく諸理論とは別のベクトルをもった脱中世型統治者理解であったことを論証する。ここに、その積極的な意義を提示し、本研究の第二の目的の達成を試みる。

4. 研究成果

(1) 本研究の成果と今後の展望

本研究は、申請当初の計画では、資料調査・解釈(2016年度)、学会報告・学術論文執筆(2017、2018年度)、最終成果としての英語著書執筆、公刊(2019、2020年度)の三期に分けて進められる予定であった。しかし、初年度から一貫して、研究が当初の計画以上に進展した。このため、さらに研究を進展させるべく、本個人研究を国際共同研究として再編成し、終了年度前年度応募を行った。したがって、本研究課題は4年間に短縮された。

4年間を通じて本研究は、「キリスト教君主」論が、一方では個人の意志/合意を軽視しがちな中世的思考形態から脱却するものでありながら、他方では近代的諸理論とも異なって、合意に裏づけられた統治者さえ法に拘束され、倫理的な目的や公共善の実現に重点をおく政治共同体を追究する有意義な試みだったことを明らかにした。

2020年度からは、本研究を敷衍した新規採択課題の下で、アメリカ、ドイツ、スペインの研究機関と協働しながら、さらに視野を広げて初期近代スペイン帝国思想の解明を試みる予定である。

(2) 国内外における位置づけ

「キリスト教君主」論は、国内外を問わず、「中世トマス主義の復興」程度にしか知られていない。本研究は、この理論を詳述する本邦で最初の、また国際社会でも数少ない学術研究であり、近代政治秩序の形成過程におけるその重要性を喚起する試みである。

同時に、本研究は、過去の思想状況の解明のみを目的とするのではなく、「キリスト教君主」論が、国家理性論や主権国家概念の確立期に、これらに帰着しない脱中世型政治共同体の可能性を追究した歴史的試みであった点に注目する。したがって、近代主権に基づく国民国家体制が揺らぎ、今後の政治共同体のあり方が模索されている今日の議論に対し、拠り所となる思考枠組の1つを提供しようと思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 松森奈津子	4. 巻 4
2. 論文標題 初期近代スペインとスコラ学 反マキアヴェリズムにみる「有用な統治」と「善き信仰」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Nyx	6. 最初と最後の頁 104-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Natsuko Matsumori	4. 巻 15 (1)
2. 論文標題 Reason and Prudence: A Study of the Discussions on the Nature of 'Indians' in Sixteenth-Century Spain (VIII)	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Journal of International Relations and Comparative Culture	6. 最初と最後の頁 165-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Natsuko Matsumori	4. 巻 15 (2)
2. 論文標題 Reason and Prudence: A Study of the Discussions on the Nature of 'Indians' in Sixteenth-Century Spain (IX)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Journal of International Relations and Comparative Culture	6. 最初と最後の頁 17-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 2件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Natsuko Matsumori
2. 発表標題 "Hospitality or Property?: The Natural Right of Communication and the 'New World' "
3. 学会等名 II International Conference on Bartolomé de Las Casas (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松森奈津子
2. 発表標題 帝国と主権 初期近代アメリカ大陸をめぐる自然的交通権の展開
3. 学会等名 トヨタ財団研究助成公開セミナー
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松森奈津子
2. 発表標題 反マキャヴェリズムにみる「有用な統治」と「善き信仰」 ボテロ、スアレス、リバデネイラを中心に
3. 学会等名 早稲田大学高等研究所（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 野口雅弘ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 230
3. 書名 よくわかる政治思想	

1. 著者名 関雄二ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 750
3. 書名 ラテンアメリカ文化事典	

1. 著者名 Natsuko Matsumori	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 290
3. 書名 The School of Salamanca and the Affairs of the Indies: Barbarism and Political Order	

1. 著者名 社会思想史学会編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 888
3. 書名 社会思想史事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	ボストン大学	プロヴィデンス大学		
米国	ハーバード大学			